



育成・保存してきた系統の中から使えそうな素材のリストアップを始めた。「とちおとめ」より大粒なもの、収量性が優れるもの、食味がいいもの、病気に強いもの…、それぞれ優れた特性をもった素材を選びすぎた。

挑戦であった。

「どの種とどれを交配すればいいのだろうか」。悩みながらいろいろ組み合わせを考えた。「あまり時間がない。だが、限られた期間の中で何としても新品種を生み出さなければならぬ」。覚悟はできていた。研究スタッフと力を合わせ、目標の特性を備えていると考えられた系統の交配に懸命になって取り組んだ。この中からいくつかの有望種が最終

段階まで残り、詳細に試験された。

数々の試練を 乗り越えて

まず交配したのは、研究所で育成された大粒で病気に強い特徴をもつ系統の「00-25-1」と「とちおとめ」だった。この系統の中には「とちおとめ」よりも大粒なものも多く、その一つに「栃木23号」の名をつけて選抜を重ねた。大粒で果実の揃いが良く、食味も「とちおとめ」並みに



良く、硬くて傷みづらい。収量性もあり食味も良かった。かなり手応えを感じる系統であったが、やはり病気に弱く、寒い時期になると果実の色が淡くなることから、あと一歩及ばなかった。

新品種開発へ試練の日々が続いたが、研究スタッフは諦めず、黙々と交配・選抜を繰り返していった。

外観に優れた 二つの株

美味しかった。しかし、やや卵型の果実であまり見栄えが冴えず、「とちおとめ」と同様に病気に対して弱かった。次に「とちおとめ」と早生で多収の「00-11-1」を交配した。交配したものの中には「とちおとめ」よりも大粒で果実が硬いものが多かった。有望種の可能性を秘めていたので、一つを選び「栃木26号」の名をつけて選抜を重ねた。大粒で果形も

平成十八年、「とちおとめ」を生み出した時のメンバーの一人であった植木正明特別研究員（現安足農業振興事務所部長補佐）が、研究チームのリーダー・いちご研究室長として古巣に戻ってきた。植木は「とちおとめ」誕生に関わった当時の熱い思いを胸に秘めて研究に打ち込んでいった

この時点で「とちおとめ」を育成した後、歴代の育種担当者が試した



想いを語る重野貴一敬称略

交配組合せは約九百、選抜した実生の数も十万余を超えていた。

研究スタッフの地道な育種の日々は続いた。家中が数多くの種から選りリストアップした交配親の系統の中に「00—24—1」という系統があった。非常に大粒で果形が良く光沢があり果実外観に優れる系統だった。だが、収量性が「とちおとめ」並みで食味が劣ったため、三年目の選抜で除外された。家中にとって気になる系統だったが、他にも優れた特徴を持つ交配親の系統があった関

係で、一年目は数組合せだけ交配して様子を見ることにした。

一年目の選抜では、研究所に新たに配属となった直井昌彦技師（現農政庁生産振興課主任）が担当することになった。経験の浅い直井は連日温室に足を運び、多い日には一日に千個近い果実をテイスティングする日々が続いた。「00—24—1」を使った組合せの中に食味が良く病気に強い「栃木20号」との組合せがあり、直井は果実が大きく外観に優れた二つの株（系統）を残すことにした。



た。

平成十九年三月、育種を中心だった家中が異動により研究所を離れることになった。夢は後輩研究員に引き継がれることになった。

ようやく一筋の光明

平成二十年一月、果実が色づき二年目の選抜が開始された。育種用の温室の中でひととき目立つ株があった。温室の柱の陰になり、

条件が悪い場所に植えられていたにもかかわらず、それまであまり見たこともない程の大きな果実を実らせていた。前年、直井が残した二株の中の一つであった。

この株に、家中の後任として赴任してきた重野貴主任研究員は魅せられた。

「これはいけるかもしれない」。

重野は迷わず選ぼうと考えた。既に付けられていた系統名を見ると「06—36—1」の名称があった。

「とちおとめ」の育成から十一年が経過し、ようやく期待の新品種誕

生に一筋の光明が差し込んだ瞬間であった。

重野はこの時の想いを次のように振り返る。

その日、いつものように温室に入りました。二年目の選抜なので、同じものが四株ずつ三百種類・千二百株ありました。それを一つ一つ観察し、テイストしていきましたが、良い感じのものはありませんでした。「これもダメか」諦めかけた時、柱の陰からぱっと目に入ってきた株がありました。それは果実が大きく、色艶があつて果形も良い、姿が全体にすっきりしていました。食味を確かめたら甘みが少なく、味は薄い印象でした。しかし、ジューシーさがありました。

運悪く温室の柱の陰になっていた、その辺はしょうがないかな、と思いました。草姿が良く、果実の大きさと外観が申し分なかった、で、残そうと決めました。次の年、三年目の選抜で日照の十分な場所で育ててやれば、きっとそれなりになると期待しました。

（文中職名略・以下次号）